

# 平成一八年度秋の特別展「明治宰相列伝」報告

平成一八年一〇月七日（土）から二六日（木）、当館所蔵の明治期の内閣総理大臣関係文書を中心に、特別展「明治宰相列伝」を実施した。

本展示で取り上げた人物、明治期に在任した内閣総理大臣 伊藤博文、黒田清隆、山県有朋、松方正義、大隈重信、桂太郎、西園寺公望は、それぞれ、維新の激動期に身を投じ、軍人として、欧米に学びつつ、近代国家化の形成と確立に力を尽くしてきた。

明治一八年に初代（第五代、第七代、第一〇代）内閣総理大臣となる伊藤博文は、「内閣制度の創設」、「大日本帝国憲法の制定」の中心人物となり、立憲政治を確立する途を拓くとともに、日清講和条約（下関条約）の締結、ロシアとの交渉、朝鮮統治の指導にあたるなど、立憲君主国家確立に向け、内政及び外交の幅広い分野で活躍した。

第二代内閣総理大臣の黒田清隆は、北海道や千島・樺太の開拓や対ロシアの北方政策で活躍したが、政党政治には消極的な「超然主義」の立場をとった。また、札幌農学校の開設や女子留學生の派遣などにも尽力した。

第三代（第九代）内閣総理大臣の山県有朋は、徴兵制や地方制度の確立を主導した。総理としては、「外交政略論」で国境としての主権線を守護し、国境に接する地を「利益線」として確保することが必要不可欠であるとして、日本が国家としてとるべき方向を提示した。この「利益線」を確保するには軍事力が必要なため、軍拡予算を組み、「民力休養」を説く民党と対立する。

第四代（第六代）内閣総理大臣の松方正義は、西南戦争による戦費捻出

で乱発された紙幣整理が課題となり、大蔵卿として、「松方財政」とよばれる紙幣整理を断行するとともに、日本銀行の設立に尽力した。総理として、金本位制の導入を実施し、日本の資本主義確立に尽くした。

第八代（第一七代）内閣総理大臣の大隈重信は、明治初期、大蔵大輔及び大蔵卿として殖産興業政策を推進。「明治一四年の政変」で失脚したが、その後、黒田内閣の外務大臣として条約改正等に取り組み、明治三一年には初の政党内閣の首相となった。東京専門学校（現在の早稲田大学）の創立者であることは広く知られている。

山県の影響を受けた第一一代（第一三代、第一五代）内閣総理大臣の桂太郎は、ドイツに留学し、日本の軍制をドイツ流に転換して国防力の強化に努めました。さらに、日英同盟を締結して、この同盟を背景に日露戦争を遂行し、日本を世界の強国の一員に押し上げた。

伊藤の後継者となり、政友会総裁として第二二代（第一四代）内閣総理大臣となった西園寺公望は、日露戦争後の鉄道国有化をはじめとする産業基盤整備を中心に戦後経営の整備を進めるとともに、満州経営や大正デモクラシーへの地ならしをすすめた。

これらの明治の宰相たちの業績を紹介し、アジアで最初の立憲君主国家として体制を整えていった明治日本の姿を、本展示を通して、映し出した。なお、展示資料は、主として当館所蔵資料のうちこれまでの特別展、企画展などに展覧されていない資料から構成されるよう注力した。来場者がパネルなどにも明治憲法の制定など立憲君主制の確立への途の「コマ

コマをご覧いただけるよう配慮した。

期間中（二〇日間）、六、八六八人の来館客を集めた。また、一〇月一四日（土）には、御厨貴東京大学先端科学技術センター教授から「明治の首相のリーダーシップ」というタイトルで、当館において、講演会を開催した。一三〇名の入場者を集め、盛況だった。

さらに、本特別展の内容は、平成一九年四月から、当館ホームページ上で初のデジタル展示会「明治宰相列伝」に活用された。